

## 保健師と保育士を目指す学生との出会い

保育科生への講義の一コマを、保健師に講話をお願いした。統合保育等が盛んになるご時世、保育士と保健師との連携も重要と思い、保育科生に保健師の存在と任務を理解しておいて欲しいという私の意図でもあった。また、同姓としても、妻として、母として、職業婦人としての話から、何かを感じて欲しいという願いもあった。

授業後の学生の感想文に「保健師は、生まれる前から死ぬまでのあらゆるところに係わっているのだということが解りました」、「保育士の仕事と保健師の仕事に似ている点がいくつかあることに驚いた」、「保育士として働いて行く上で、保健師さんなど様々な職業の方々と手を取り合い、子どもの保育に取り組んでいかなければならないな！と感じました」というような感想が多かった。また、「一番印象に残ったのは、抱っこが苦手なお母さんがいて、保健師が抱っこしたら泣きやんだという話だった。このお母さんにとったら、自分がお腹を痛めて産んだ子どもなのに、抱っこしても泣きやまない。これは本当の悩みであり、苦痛である。それを克服して、お母さんの愛情が1番なのだからと語りかけた話。保健師は抱っこが上手になることでなく、その手助けをするのが保健師でないかという話だった」、「働く中で、解らないことが数多くあると思います。そんな時一人で悩むより、今日の話にあったように早く SOS を出す勇気を持ち、周りの方々、親の方達と一緒に解決していきたいと思いました」の感想のように、プロとは何かを感じ取ってくれたようである。

さらに、講話する姿から「　　さんは、保健師の仕事が好きで、自分の仕事に誇りをもっている人で、とても素敵なお方だと思った」の感想のように、家庭と職業を両立している同姓の生き方にも、感銘を受けたようである。

当の保健師からも後刻、「素敵な出会いの時間をいただき、ありがとうございました」とのメールが入った。

私も若い頃、元院長にいろんな所で学生に話す機会をいただいた。そうした中で自分自身が成長することができたと感謝している。それだけに、元院長等への恩返しとも思い、後輩に講話の機会を作っているが、奇しくも感想の中に「　　さんは、阿部先生に出会って、本当に恩恵を感じてるんだなあと思った」とあった。恩返しができているかなあという意味で、こうした感想を聞くのは嬉しい限りである。

(2003年01月10日記)